

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 37 2015.06

総会報告	
第13回北大総合博物館ボランティアの会 総会、講演会および懇親会	在田 一則 --- 1
新館長挨拶	
総合博物館 新館長就任挨拶	中川 光弘 ----- 3
特別寄稿	
新渡戸稲造と札幌遠友夜学校 (第1回)	藤田 正一 ----- 4
活動報告ほか	
総会講演会の報告	大山 圭也 ----- 6
毎冬の「卒論ポスター発表会」へのお誘い	湯浅 万紀子 ----- 7
平成遠友夜学校という主体	小山田 伸明 ----- 8
ポプラチェンバロは 何処へ?	石川 恵子 ----- 9
昔のお宝新聞紙を探して	久末 進一 ----- 10
2015 ゴルカ地震	在田 一則 ----- 11
お知らせ	----- 14

総会報告

第13回北大総合博物館ボランティアの会 総会、講演会および懇親会が開催されました

会長 在田 一則

第13回(2015年度)北大総合博物館ボランティアの会総会および講演会が2015年6月5日(金)16時から総合博物館2階共同研究室で開催されました。それに引き続き懇親会が行われました。以下に簡単に報告いたします。

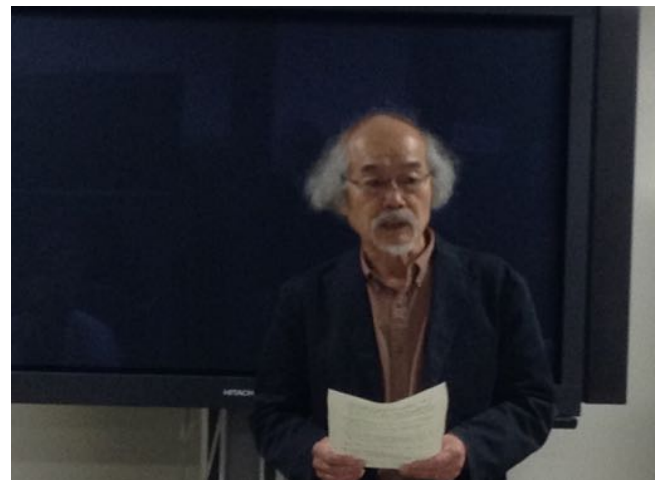
総会(16:00~16:30)

総会は21名が出席して行われました。会長挨拶の後、以下の2014年度活動報告および2015年度活動計画案の提案があり、承認されました。

- 2014年度(2014年4月~2015年3月)の主な活動
 - ボランティア談話会(1回)

第30回談話会(8月22日、17名参加)石川満寿夫氏：北海道の水産業の現実と将来展望
 - 博物館におしかけよう会(4回)

第17回(6月20日、16名参加)福山醸造資料室・醤油工場



2014年度活動報告と2015年度活動計画案を提案する在田会長

- 第18回(10月14日、16名参加)ニッカウイスキー工場・博物館
- 第19回(12月6日、9名参加)札幌市公文書館
- 第20回(2月21日、9名参加)道庁旧本庁舎「赤れんが」

(3) ボランティア ニュース(通常号 4 回)

第 33 号(6 月 1 日)、第 34 号(9 月 1 日)、第 35 号(12 月 1 日)、第 36 号(3 月 1 日)

(4) その他

- * 横田誠三氏(ポプラチェンバロ製作者)の講演会(「北大ポプラチェンバロ ポプラ並木倒木から 10 年」)をチェンバログループのお世話で 12 月 8 日に開催しました。20 名が参加し、終了後横田さんを囲んで懇親会を行いました。
- * 第 12 回総会および講演会、懇親会を 5 月 23 日に行いました。
講師: 長谷川雄助氏(日本山岳会元北海道支部長)
演題: 北海道の分水嶺を歩く
- * ボランティアグループ連絡会(事務局)を原則として隔週の金曜日の午後 1 時から 30 分間ほどボランティア控室(N314A)およびリフレッシュルームで開催しました。
- * 恒例の総合博物館前庭掃除を 5 月 14 日に行ないました。

2. 2015 年度の活動計画

今年度から総合博物館は 2016 年 7 月頃まで休館となり、来館者は不在となりますが、各グループの活動は各指導教員のもとに今までどおり進め、ボランティアの会もこれまでの活動を地道に積み重ねます。ボランティア ニュース(8 頁~12 頁)も年 4 回の定期発行に努めます。好評の「〇〇先生小伝」シリーズは休館の間は休載とします。リニューアル後の連載再開は五十嵐恒夫名誉教授による「館脇 操先生小伝」の予定です。談話会や博物館におしかけよう会を活発に開催し、ボランティアどうしのさらなる親睦を図ります。談話会でお話を聞きたい講師、博物館におしかけよう会の訪問先などの希望をお知らせください。

3. 2015 年度の体制

2015 年度の会長、グループ連絡会メンバーおよびボランティア ニュース編集委員会メンバーは以下のとおりです。

* グループ連絡会メンバー

在田一則(会長、地学)・沼田勇美(事務局長、図書)・星野フサ(植物)・志津木真理子(昆虫)・(考

古学)、寺西辰郎(地学)・(メディア)・今井久益(化石)・児玉 諭(展示解説)・新妻美紀(チェンバロ)・大山圭也(北大の歴史/平成遠友夜学校)・(リーフレット翻訳)・(4D シアター)・(第二農場)・(ハンズオン)

* 編集委員会

星野フサ(委員長)・今井久益・大山圭也・児玉諭・沼田勇美・山岸博子・(石川満寿夫:顧問)

なお、ボランティアの各グループの在籍数はほぼ以下のとおりです(2015 年 6 月現在の延べ数は 229 名)。植物・菌類資料(27 名)、昆虫標本(23 名)、考古学資料(37 名)、地学標本(13 名)、メディアボランティア(3 名)、化石標本(47 名)、北大の歴史展示(1 名)、展示解説(20 名)、リーフレット翻訳(1 名)、平成遠友夜学校(9 名)、4D シアター運営(8 名)、チェンバロ展示(14 名)、図書室業務(18 名)、第二農場(8 名)、ハンズオン(9 名)

講演会(16:40~18:00)

講師: 菊田 融氏(北大総合博物館 資料部研究員)

演題: 札幌圏の自然史系施設連携によるプロジェクト紹介

(講演内容は大山氏の記事を参照してください)

懇親会(18:00~20:00)

講演に引き続き同じ会場で、菊田さんほか 17 名が参加して楽しく歓談しました。



懇親会の様子

新館長挨拶

総合博物館 新館長就任挨拶

総合博物館館長 中川 光弘

この4月から津曲敏郎先生の後任として、北海道大学総合博物館の館長に任命されました。就任にあたって自己紹介とともに皆様へのご挨拶を述べさせていただきます。

私は徳島県で生まれ、小学校高学年から高校卒業までを愛媛県松山市で過ごしました。大学進学に際して、北国に憧れ北海道大学の受験を希望しましたが、父親から「海を2つ越えるな」と反対されました。当時は瀬戸大橋も青函トンネルもなかったのです。それではということで東北大学に進学しました。そして博士課程終了後、民間企業勤務を経て、平成元年に北海道大学理学部に着任し、現在に至っています。紆余曲折はありましたが、高校時代の希望を果たし、北海道まで来ることができた訳です。私は火山学を専攻しましたが、その理由は小学校や中学の修学旅行で訪れた阿蘇山や桜島などの、四国には無い、火山の雄大な風景に感動したためでした。私は特に地質学的手法により火山の噴火履歴や噴火様式を明らかにし、さらに物質科学的手法を用いてマグマ（それが固結した火山岩）を解析して、火山深部構造やマグマプロセスの解明を目指しています。フィールドワークが好きで、研究対象の火山は日本の火山だけではなく、これまでにニュージーランド、パプアニューギニア、ハワイ、中国など興味ある火山を調査研究してきました。最近では、千島列島やカムチャッカの火山活動の解明や、中長期噴火予測手法の開発、超巨大噴火の準備過程の解明などを中心に研究を行っています。

私はこの3月まで資料部長として、博物館の運営に関係してきました。館長就任して日も浅くまだまだ慣れない仕事で戸惑う毎日ですが、標本・資料整理や展示解説などの博物館活動におけるボランティアの皆さんの果たしてきた役割の大きさを、今更ながら実感しています。現在では200人近いボランティアの皆さんに博物館活動を支えて下さっています。私は皆さんの声を積極的に拾い

上げ、活動しやすい環境を維持し改善してゆくことが、館長の重要な仕事のひとつだと考えています。

実は日本における大学博物館の歴史は浅く、また限られた予算と人員の中で、全国の各大学では試行錯誤で活動が続いているのが現実です。しかし自治体などの博物館にはない役割が、大学博物館にあるのは間違いないでしょう。その役割のひとつが、北海道大学を社会に紹介する、つまり大学の歴史や、そこで行われている教育の特色、そしてどのような研究が行われているかを、社会に発信する窓口としての役割です。そのような役割は現在では、HPやSNSなどのネットでの発信が主体となった感がありますが、博物館では「モノ」の展示を通じて発信する特徴があります。実際に「モノ」を見るのは、画像を見るだけでは得られない印象を人に与えます。場合によってはそのような「モノ」に触れることもできるでしょう。その点は博物館の持つ、他のメディアにはない強みと考えられます。その「モノ」である標本・資料整理・維持する活動や、展示解説など、博物館を社会に発信する際に、ボランティアの皆さんの存在は重要です。また社会での経験の長い皆さんは、社会の目で身近に博物館を見ている存在です。その視線で積極的に博物館運営に関わっていただくことが、大学博物館をよりよくすることに繋がります。

皆さんご存知のように博物館は現在、改修工事のために休館中です。そのためボランティアの皆さんには、ご不便をおかけしていますが、来年夏のリニューアルオープンに向けて博物館スタッフは鋭意準備しています。この1年をいかに有意義に活動するかが、これからの10年、20年の博物館を決めると考えています。当館が来夏からの再スタートに向けて、そしてさらに理想の大学博物館を目指すためにも、ボランティアの皆さんの変わらぬご協力が不可欠です。ともにこの1年、万全の準備をしてゆこうではありませんか。

新渡戸稲造と札幌遠友夜学校（第1回）

獣医学研究科名誉教授 藤田 正一

連載を始めるに当たって

- ・これ程どんな人でも入れる学校はありません。
- ・働きながら勉強できます。
- ・いくら年をとっていても差し支えありません。
- ・男でも女でもかまいません。
- ・いつでも入れます。
- ・月謝はいりません。
- ・学用品はあげます。
- ・先生は諸君の友達です。

かつて札幌にはこんな学校があった。新渡戸稲造夫妻が1894（明治27）年に貧しい子供たちや晩学者のために開設した札幌遠友夜学校である。学校は現在の札幌市中央区南4条東4丁目、当時吹きだまりのように集まった貧しい人々が生活する地域の一角にあった。遠友夜学校では札幌農学校の学生たちが無償で先生役を務めた。学用品代も彼らの小遣いから出してあげた。貧困故に学校に行けなかった子供たちは、この学校を愛し、昼間の労働の後、「裸足で走って学校に行った。」「生徒と教師がこの学校で白熱を話し合った。」と記録に残る。今の学校が求めても実現し得ぬ理想の教育の原点がここにあった。そして、ボランティアの原点がここにあった。

本連載ではこの学校を設立した新渡戸稲造が、彼の精神的誕生地・札幌で何を学び彼の人となり確立して行ったのか、彼の精神の実践である札幌遠友夜学校とはどのような学校で、教師や生徒たちがどのような気持ちで教え、あるいは、教えを受けていたのか、そしてこの学校が廃校とされるに至る経緯をお話ししたい。何故、この高貴な精神と行いの遺産が忘れ去られようとしているのかに思いを廻らしつつ。

今再び子供の貧困が問題となっている。登校拒否や学校に行かない子供の数も増えて来ていると言う。過去に札幌遠友夜学校のような学校があったことを学ぶことは彼らに手を差し伸べる一助にもなるであろう。更に、当初は高く評価された札幌



新渡戸稲造が遠友夜学校の校舎として使用するために購入した札幌市南4条東4丁目の古家（1910年～1943年）

札幌遠友夜学校を支えた思想が、軍国主義へと流れる時代の変遷とともに弾圧され、閉校に追い込まれる様子を学ぶことは、教育やマスコミに対する政権の介入の強化と、特定秘密保護法を成立させ、集団的自衛権の法制化を急ぐ今とこれからの時流を見極める上でも重要であろう。

忘れられていた新渡戸稲造と札幌遠友夜学校

1984（昭和59）年、新しく登場した5千円札を見て、多くの日本人は「この人誰」「何故お札の顔に？」と、彼の名前も、顔も、ましてやその輝かしい業績も知らなかった。新渡戸（にとべ）と言う名字でさえ読める人が少なかったのである。今でも彼が札幌農学校の二期生であり、生涯札幌を愛し、「僕が考えるすべてのことは、必ず札幌に結びついていると言うことを君は知っているでしょう。本当に僕は、いつの日か、神のために、そして札幌のために何か役に立つことが出来るように祈り、熱心に望んでいます。」（親友・宮部金吾への手紙1885）、「私の精神的誕生地は札幌である」（札幌独立キリスト教会百年の歩み 下巻）と語っていたことを知る人は少ないだろう。

彼の業績の主なものをあげるだけでも、国際連盟事務次長、ユネスコの前身・国際知的協力委員会設立、オランダ紛争に於ける新渡戸裁定、植民地台湾の製糖業の改革を通して現地の人々の生

活の向上に貢献、札幌農学校教授、京都帝国大学教授、東京帝国大学教授、第一高等学校校長、東京女子大学初代学長、東京女子経済専門学校（新渡戸稲造文化学園）初代校長、拓殖大学学藍、同志社大学理事、協同組合運動を推進し、自らも、東京医療利用協同組合（東京医療生活協同組合）の初代組合長、農業協同組合岩手支会会長を務めるなど、活躍は多岐にわたる。そして、「武士道」の著者でもある。今回の連載では彼のこれらの業績に付いては詳しく語ることはない。ここで取り上げるのは、彼が国際的に有名になる前、まだ札幌農学校の若き教授を務めていた頃、彼の妻メアリーとともに札幌の貧しい子供たちや晩学者のために設立した「札幌遠友夜学校」についてである。

それにしても、これだけの輝かしい業績を持ち、今日においても世界的に高い評価を得ている人物でありながら、戦後の日本ではその名字の読み方さえ分からない程に忘れ去られてしまっていたのは一体何故なのだろうか。奇跡的に5千円札の顔として登場し、その名もやや知られるようになったが、これも2004年には樋口一葉に取って代わられてしまった。1万円札の顔は福沢諭吉のままなのに。そういえば、驚くべきことに、つい最近まで、社会科や歴史の教科書には戦前戦後を通じ、国際舞台で最も活躍し、世界から最も敬愛された日本人・新渡戸稲造の名は無かった。まるで、意図的に歴史教科書から抹殺されたかのように。いや、歴史は時代の強者が彼らの都合の良いように書き残すものである。新渡戸の存在や思想が不都合である理由があるのかもしれない。

そんな彼を一躍、再び有名にしたのが、2003年のアメリカ映画（日米ニュージーランド共同製作）トム・クルーズ主演の「ラストサムライ」である。西郷隆盛の西南戦争がストーリーのモデルであるが、トム・クルーズも、監督のエドワード・ズウィックも新渡戸稲造著の「武士道 Bushido-The Soul of Japan」を何度も読み返し、武士道精神に惚れ込んでこの映画を制作したということである。この映画の大ブレイクの後、英文で書かれた新渡戸著の「武士道」の訳本が多数、本屋の店頭



札幌市中央勤労青少年ホーム内(中央区南4東4)にあった遠友夜学校記念室(1964年~2011年)

を飾るようになった。日本人は自らの伝統文化の価値についても、外国から教えてもらわないと気がつかないので。そして、不幸にしてその価値を外国から教えてもらう機会を逸した、多くの優れた伝統文化は、それを生み出した日本人社会からは評価されずに姿を消してしまった。

その典型的な出来事がここ札幌で、昨年起こった。札幌の芸術文化の振興を計るということで、大々的に企画され開催された、札幌国際芸術祭の開催のために、札幌市教育委員会が、決して手放してはいけない自らの貴重な文化遺産の展示室を解体し、貴重な資料を手放してしまったのである。それが、今回の連載の主題「札幌遠友夜学校」の記念室であった。2014年は新渡戸稲造が遠友夜学校を設立してから120年、閉校から70年になる節目の年であった。本来ならば、新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を支えた人々を顕彰する記念行事が開催されてもよい年回りであったのである。

元北大予科教授・蝦名賢造は、「新渡戸稲造夫妻の札幌に残したもっとも美しい、高貴な遺産の一粒は、このささやかな札幌遠友夜学校であった。」「これらの教師と子供たちを包容して、実に半世紀にわたって一貫して脈々と流れるヒューマンニズムの精神は、いかにこの地域の教育の深層に注入されたことであろうか。」と指摘する。この貴重な教育の記録を、こともあろうに札幌市教育委員会は放り出してしまったのである。嗚呼、何のための教育委員会なのか。何のための文化振興なのか。

＜次号に続く＞

講演会報告

北大の歴史・平成遠友夜学校ボランティア 大山 圭也

総会に引き続き、菊田融氏（北海道大学総合博物館資料部研究員）による講演会が開かれました。

「札幌圏の自然史系施設連携によるプロジェクト紹介」という演題でCISE（チセ）（community for intermediation of science education）ネットワークの活動の内容と現況についてお話頂きました。CISE ネットワークは札幌周辺において、科学館、博物館、図書館、動物園などのネットワークを構築し、多面的な実物標本体験ができる教材開発を進め、社会教育や学校教育における実物科学教育を推進する活動をしています。

その具体的内容は

- ① パラタクソノミスト（準分類学者）養成講座
—— 標本の作り方などを学ぶ
- ② テーリングシステム教育
—— 一つの科学テーマについて複数の連携教育機関を巡りながら学ぶ。

というものです。

パラタクソノミスト養成講座は、北海道大学を中心に、現在まで、昆虫、ダニ、水鳥、植物、キノコ、岩石、鉱物、鉱床、考古学など約30の分野について実施され、8年間で約1,700人が受講しています。また、テーリングシステム教育では、ヒグマ、サケ、セミ、恐竜、海獣など、7つの対象について円山動物園、定山溪自然の村、札幌市青少年科学館、北大総合博物館、札幌市中央図書館などを巡り、学習する体験を53回（1,226名参加）実施してきました。さらに、この分野では、野外観察会や学校内での実物標本学習のための、トランクキット（資料、標本、写真、解説パネルなどの教材セット）の開発や、貸し出しシステムの構築も進められています。

自然と触れ合う実体験の機会が失われつつある現在、実物科学教育は重要な役割を担っています。特に小中学生、高校生に自然科学に対する興味関心を持たせ、自然に対する謙虚な精神、態度を育成することは、きわめて大切であると思います。



講演中の菊田融氏

教育現場との連携も進められているとのことですが、決められた教育課程の中に、どのように実物科学教育を導入するかが、大きな問題点とのことでした。実践例として、伏見中学校の読書推進事業の一環として、図書館と連携して実施した、トランクキットを用いた授業についての報告がありました。授業後のアンケートによると、生徒の97%が、<とてもわかりやすかった>と答えていますが、一方で、野外授業の実施状況は、3回以上/年は27%、1、2回/年は44%、ほとんどなしは29%となっています。

そこで、学校内での平常の授業にトランクキットを導入することが期待されるのですが、次のような問題点があげられました。

- ・授業に沿ったトランクキット制作の困難性。
- ・教員へのサポート。
- ・補修などのメンテナンス。
- ・輸送方法および費用負担。

これらの課題について検討委員会を立ち上げ、取り組んでいるとのことでした。

ご多忙の中、ご講演下さいましたことに感謝申し上げます、以上報告とさせていただきます。

毎冬の「卒論ポスター発表会」へのお誘い

総合博物館 博物館教育・メディア研究系 准教授 湯浅 万紀子

本学の学部4年生が卒業研究を1枚のポスターにまとめ、博物館で来場者に分かりやすく説明して質疑応答する「卒論ポスター発表会」。毎年2月末から3月の週末の2日間に開催されるこの発表会は、7年前に始まりました。

この取り組みは、北大の全人教育の一環として展開している「ミュージアムマイスター認定コース」の社会体験型科目に位置づけており、学生達が卒業研究を見直し、市民の方々に研究成果を伝える取り組みを通して、コミュニケーション能力を身に付け、異分野への関心を広げ、大学博物館への理解を深めることを目指しています。2014年度は文学部と水産学部、理学部、農学部の学生が発表し、その内容は日本美術から古生物、宇宙、生命科学、農業工学、建築と多岐に渡りました。本誌36号で報じられたようにボランティアでもある理学部の太田晶さんが参加した他、これまでもボランティアも務める学生達が発表会で活躍してきました。

文系の学部生にはポスター発表の経験はほとんどありません。理系の学部生には学部や研究会などでのポスター発表の経験はあったとしても、市民の方々を対象にした発表経験はありません。彼らは、4年間の研究成果を1枚のポスターにまとめるまで、博物館担当教員らから内容やデザインについて指導を受け、発表者同士で意見交換し、改訂を繰り返します。また、多様な来館者を想定したりハーサルを重ねます。

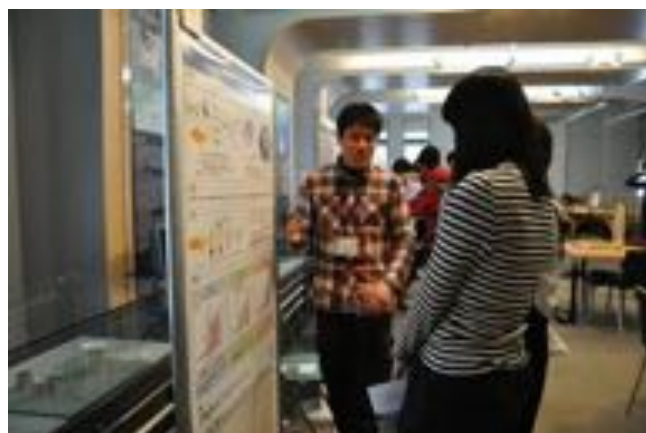
そして、発表会の2日間、さまざまな年代の異なる関心をもった来館者への説明に苦労しながらも、来館者との対話を展開していきます。これまで、ボランティアの方も多くご来場下さいました。お寄せいただいた質問や意見は、発表者達に新鮮な視点や研究への有意義なヒントを与えて下さいました。

発表会では、市民と北大教職員から成る審査員の審査による最優秀賞、優秀コミュニケーション

賞、優秀デザイン賞という3つの賞と、来館者の投票による来館者賞を設けています。発表会2日目には、授賞式と講評会が行われます。2014年度の講評会には、資料部研究員の石川満寿夫さん、ボランティアの福澄孝博さんと星野フサさんも参加して下さい、発表者達に応援のメッセージを述べて下さいました。発表者達は、ありがたい励ましをいただき、感激した様子でご意見を伺っていました。

この発表会の運営もミュージアムマイスター認定コースの社会体験型科目と位置づけ、発表者とは別の学生達が担い、ポスターとプログラム冊子の制作、会場設営、当日の受付、表彰式・講評会の司会進行など行っています。北大カフェプロジェクトによるカフェも併設されてきました。

ボランティアの皆様には今後もぜひこの取り組みにご参加いただきたくお願い致します。学部を横断して北大の学生の研究を市民にお伝えするこの取り組みは、総合博物館らしい教育として学内外からご好評をいただいています。一連の取り組みや学生達の最終考察レポートは当館HPに多数の写真と共に紹介しておりますので、ご覧下さい。



2014年度卒論ポスター発表会会場の様子

平成遠友夜学校という主体

理学部 3年 小山田 伸明

自分が平成遠友夜学校に顔を出したのは北海道大学に入学して間もない日のことでした。サークルにも部活にも入らず、学業と慣れない一人暮らしに追われていたそんな折にふと足を踏み入れたのです。当時の僕にはお金も払わず自由に大学の先生の話が聞ける、そんな場所があること自体斬新で、知らない世界を知れて得した気分だと悦に浸っていました。そんな風に足しげく通いつづけ、気づけば運営側として携わりはや2年が経ちました。長いようで短い2年、今では程よい距離感で平成遠友夜学校に関与できているように思います。

さて、今回自分が原稿を書くからには自分が始めた高校生向けの“学習支援”について話をしたいと思います。学習支援というのは昨年の8月から始めた高校生向けの勉強の支援で、平成遠友夜学校のボランティアとそれに限らない大学生を先生役に試行錯誤しながら行っている活動です。火曜日と木曜日の週二回、夜間にひっそり、こじんまりと集まっています。学習支援は元来の遠友夜学校に擬えたもので、一人親家庭の増加や、教育格差の拡大、奨学金問題をはじめ、現代においても依然として深刻な“貧困”があることを知り、今の時代でも、むしろ今の時代だからこそ必要なのだと感じたのがきっかけです。そして彼らのように貧困に巻き込まれた人たちや障害を持った人々を抱擁すること、それが社会をさらによい方向へと向けていくことになると思っています。その意味で彼らはむしろこの社会を豊かなものにする“菩提樹の種”であると思ひ活動を続けています。

高校生は今では全体で20名、頻繁に来る人は10名程です。昨年よく来ていた高校生3年生も無事に希望の大学に進学し、幸先のよいスタートを切りました。それでもまだまだ当初の遠友夜学校には遠く及びません。何も真似するばかりがこう言った活動の重要性ではないのですが、それでも当時のように大学生が自分の意思を持って何か社会に働きかけていく、或いはそうした意識を高め

る土台を作る、そういった側面が不足しているように感じているからです。

ところで平成遠友夜学校では講師や学習支援の先生に大学生や市民の方もお招きしています。ここでは教える側と教わる側という違いはあれども、両者あつての平成遠友夜学校です。遠友夜学校はどちらが偉いとか、貴賤の違いもなく皆が一つの輪になってできているのだと僕は信じています。

そういった意味からもやはりもっともっといろんな人に聞きに来て欲しいし、話に来て欲しい、どんな些細なことでも手伝いに来て欲しい、と思います。昨今、学生は就活に、社会人は異様なまでの仕事に追われる社会で、効率とお金が何よりも重視されているように見えます。そんな殺伐とした社会の風にあつて、平成遠友夜学校の意義はなかなか伝わりづらいこともまた肌で感じています。されどもそんな社会なればこそ、空っ風を撥ね退けるような輝きが平成遠友夜学校にもあればよいなあと感じる毎日です。

自分にできることは些細で、取るに足らない人間一人の一步ですが、そこに賛同しあるいは異論を唱えながらも手を取り合つて輪を成すことで可能性が膨らんでいく。平成遠友夜学校が今日の様にあるのはいろいろな人の力に因るところのものです。ですからこれを読まれた方もまた足を運ばれることを切に願ひ、稚拙な話を終わりにしたいと思います。

平成遠友夜学校に関係する全ての人に感謝して。



大学生による高校生学習支援風景 左2人の女性と、右から2人目男性が高校生。筆者は右端

ポプラチェンバロは 何処へ？

チェンバロ ボランティア 石川 恵子

北大総合博物館は、4月から耐震工事のため、来年夏まで休館になっていますが、それに伴い、一階「知の交流コーナー」の片隅に展示されていたチェンバロが、この度学内の「情報教育館」（北17西8）3階の多目的中講義室で預かって頂くことになり、4月11日（土曜日）午後に無事移動を済ませました。

当日は、運搬業者の他に、博物館の担当教員の大原先生、山本先生、スタッフの方、ボランティアから4名、情報教育館の方の計8名が搬出、搬入を見守りました。

2004年9月の台風18号により、北大のポプラ並木の老木は、無残にも半数ほど倒れてしまいましたが、その一部は、故市川信一郎氏の発案と多くの方々のご支援、ご協力により、横田誠三氏の制作でイタリアンモデルの古楽器の名品、ポプラチェンバロとして蘇り、北大総合博物館に展示され、多くの方に感銘を与えてきました。

楽器の傍に置かれた木製看板には、「ポプラのチェンバロ、木魂（こだま）の音色」と書かれています。昨年の暮れ、コンサートに立ち寄られた中国からの来館者は、その「木魂」の文字に見入っていましたが、「中国と日本は、同じ漢字なので、意味は分かる。」と仰って、外国人ながらポプラチェンバロの由来や意義、価値を良く理解して下さいった様子で、感慨深いことでした。

2006年より博物館の一階の一隅に展示物の一つとして置かれ、博物館の歴代の担当教官、スタッフの方々、ボランティアが、繊細な古楽器のポプラチェンバロの状態を良好に維持するために、管理には最大限の努力を惜しまず、見守ってきました。時折、メンテナンスに来て下さる制作者の横田先生からも「思ったより楽器の状態が良い」と、日頃の管理については認めて下さっています。

定例のコンサートには、国内のみならず海外の各国からも来られますが、ポプラチェンバロの由来やその美しい音色には、皆様必ず感動されます。

その美しい響きに魅了された多くの方が、愛着を持ってコンサートに足繁く通って下さいました。3月25日（水）休館前の最後の定例コンサートでは、予想外に多くの方が来て下さり、「チェンバロの音を聴けなくなるのは寂しい」、「チェンバロはどうなるのか心配で来ました。」とポプラチェンバロとの暫しの別れを惜しんでおられました。

移動先については、古楽器特有の維持管理（温度、湿度等環境整備）の問題があり、決定までには、津曲前館長始め諸先生に大変お世話とご心配をお掛けすることとなりました。

設置場所としては、室内楽ホールのような申し分のない環境で預かって頂き、温度湿度の管理もして下さいますが、ボランティアも交代で様子を見に、調律等のメンテナンスに通います。今後の演奏活動については、今のところ未定ですが、来年のリニューアルオープンを楽しみに待っていて下さる方々に、ポプラチェンバロの美しい響きをお聴かせできるように、しっかりメンテナンスをして見守っていきたいと思います。



情報教育館に収めたポプラチェンバロ
4月11日、山本順司先生撮影

昔のお宝新聞紙を探して

図書ボランティア 久末 進一

“戦後 70 年”とは限らず、図書ボランティアでは特別「新聞班」を仮設置して、戦前から明治、大正時代にまでさかのぼって、昔の実物新聞紙を収集、保存、整理に努めている所です。

きっかけは、植物ボランティアで再発見された植物標本作製のための挿み紙、通称「押し葉新聞紙」の使用済み廃棄分が大量に持ち込まれたことから、植物学界の権威、宮部金吾先生が明治 22(1889)年に札幌農学校の教授に就任され、昭和 2 (1927)年に北海道帝国大学を退職するまでか、あるいはその後任教授が、植物学教室で教鞭を執っておられた時期と合致する時代の明治、大正、昭和初期の新聞紙が含まれていたのです。これは当時を語る歴史史料です。

これら押し葉新聞は、提出論文に添える証拠として採取した植物を乾燥するために使用したものが残っていたのかも、、、。

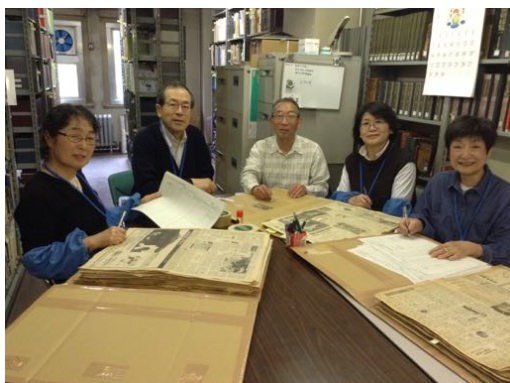
その種別も中央紙に限らず、道内外の地方紙も多く、「小樽新聞」「函館新聞」はじめ 100 紙を超える多彩さで、これは夏冬休暇の帰郷時に、現地採集した植物標本を挿んで持ち帰った際の郷土の新聞であり、出身地が異なる学生たちが全国各地から集まった、北大ならではの特色を示すものではないかと思えます。

「新聞班」では平成 25 年以来、古新聞紙を選別、クリーニング、記録、補修し、特製ファイルに集

積保存する「資料化」作業を継続していますが、昔の新聞記事を拾い読みして、その面白さについて、作業の手が止まってしまう。脈絡もなく、雑多な断片情報ですが、例えば「明治 37 年前後」と大区切りした年代で、異なる数紙を並列に並べ、横断して読み比べてみると、政情や世相に「日露戦争」が濃厚に浮かび、生ま生ましい明治という時代の空気が伝わってきます。

たかが昔の古新聞とは云え、文字だけ、画像だけ、知識だけのデジタル化情報の及ばない臨場感は、実物新聞紙という情報媒体ならではのものと思います。100 年前の出来事が昨日のことに、手にした新聞紙の記事から伝わります。途切れた時代が過去から現在に、地続きになって甦えるようです。これは情報のタイムカプセルです。身辺を見回してみれば、歴史ある北大キャンパス内外には研究室や倉庫が多く、棚の資料や標本、発掘遺物は数知れず、それら学術物品を保存保護するために、明治の昔から詰め物や梱包、その他、多目的に活用されてきたのが新聞紙でした。植物標本に限ったものではないはず。思いがけない所にまだ、“お宝新聞”が埋もれて忘れられているかもしれません。見つけた方は、ぜひ、「新聞班」へお知らせ願います。また、興味のわいた方はのぞきにきてください。

(図書ボランティア「新聞班」)



図書ボランティア「新聞班」メンバー
筆者は左から 2 人目



古新聞紙のいろいろ

2015 ゴルカ地震

地学ボランティア 在田 一則

2015年5月25日午前11時56分26秒（日本時間では同日午後3時11分26秒）に中央ネパールの古都ゴルカ北方のバルパック村（図1）近くでM7.8の地震（2015 ゴルカ地震：深度15km）が発生し、東南東へ約80km離れた首都カトマンズをはじめ、山間部を含め広範囲に甚大な被害がありました。この地震とその後の余震による犠牲者数は5月17日現在8,500人を越えたと報道されていますが、さらに増えると予想されます。カトマンズでの最大震度は日本の震度階の6弱といわれています。しかし、不幸中の幸いというか、レンガ造りの家が多いことと、ネパールの昼食時間が2時頃と遅いため、地震発生時には火が使われていなかったこともあって、火事はほとんどなかったようです。

ネパールで大地震発生と聞いたとき、私は、言い方は悪いですが、とうとう起きたかと思いました。ご承知のとおり、インド大陸は1億年以上前には南半球にあり、それが20cm/年ものスピードで北上し、約5千万年前に北のユーラシア大陸に衝突しました。ヒマラヤはその産物です。インド大陸の動きは衝突後10cm/年になりましたが、その押す力によりヒマラヤの深部では多数の衝上断層（岩層がゆるい角度の断層にそって他の岩層に押し上がるタイプの断層）が形成されて、岩層が屋根瓦のように積み重なり、高い山脈になりました。現在もインド大陸は4-5cm/年で北へ動いており、それによりヒマラヤでは過去にM8前後の大地震が何回も起きています。

しかし、ネパールでは、1934年のM8を越えたネパール-ビハール大地震以来、M6程度の地震は西ネパールなどでありましたが、M8クラスの地震はなく、ネパールは長い間不気味な静穏状態がありました。ヒマラヤ研究者たちは大地震がいつ起るのだろうかという不安をいただいていたと思います。とくに、1834年の地震で潰滅状態になったカトマンズではその再現が危惧されていました。ネ



図1 尾根に広がるバルパック村（1989年10月撮影、背景はルピナ・ラ(峠)方面）

パール政府もそれを意識し、地震観測網の整備を考えていたようですが、なにぶん外国の援助が頼りですので遅々として進まない状態でした。

今回大きな被害を受けたカトマンズ（標高1,300m前後、人口約170万人）は径25kmほどの盆地のなかにあり、まわりには3,000m近い山々が連なっています。カトマンズ盆地には、18世紀中頃まで現在のカトマンズ・パタン・バクタプールに三つの王国があり、それぞれに残る古い王宮や街並は観光スポットであり、世界文化遺産にもなっています。しかし、今回その多くが崩壊したようです（図2）。カトマンズ盆地にはその起源を暗示するおもしろい伝説があります。そこにはかつ



図2 崩壊した古都バクタプールの街（小倉清子さん撮影）

て蛇の王が住む聖なる湖があり、そこにマンジュシュリー菩薩（日本では文殊菩薩）が獅子に乗ってやってきて、剣で盆地の南を切り裂いて湖水を南へ流してしまった。現れた肥沃な土地に人々が住みつき、文殊菩薩の弟子のグルマーカラが最初の王になったというものです。実際日本グループの調査研究によると、盆地の地盤は約 100 万年前から 1 万年前までの厚さ 600m ほどの地層からできていて、下部は河川堆積物、中部は湖成堆積物、上部は湖成デルタ堆積物からなっています。文殊菩薩の切り開いたといわれる場所は、カトマンズの南にあるチョバルというところで、石灰岩の狭い谷になっています。おそらく湖の南にあった河川の北への谷頭侵食が進み、境界をなしていた石灰岩が崩壊して湖水が流出したと考えられます。盆地には石器なども見つかっており、湖のほとりで暮らしていた人たちの記憶が伝説として今に伝わっているのかもしれませんが。このように、カトマンズの街は湖成層などからなる軟弱地盤の上にあり、また古くからの耐震強度のない建物が多く残っているため被害が大きくなったと思われま

す。地震による災害で想定されていたのは、氷河湖決壊や地すべりによる被害もあります。ヒマラヤにはたくさんの谷氷河がありますが、氷河の末端には氷河湖ができます。氷河に運ばれてきた土砂（氷礫土）が氷河の末端に堆積して、堆石丘（モレーンといいます）ができ、それがダムとなって氷河湖ができます。近年の地球温暖化により氷河の融解が進み、あちこちで氷河湖が大きくなっています。地震によってダムが崩壊したり、湖の側面から大量の岩石や氷河氷が湖面に崩落して湖水が溢れ出てダム（モレーン）が決壊したりして、湖水が一気に流出して下流に洪水をもたらすことがあります。近年も氷河湖決壊による洪水被害が発生しています。今のところ、今回の地震による氷河湖決壊は報道されていませんが、今後の余震による決壊もあり得ますので、十分な警戒が必要です。

山間部では、地すべりの被害が深刻のようです。カトマンズの北方数 10km に、英国の登山家ティルマンが世界でもっとも美しい谷のひとつと讃えたランタン谷があり、その U 字谷（氷河の侵食に



図 3 ランタン谷最奥のキャンジンゴンパ（1999 年 10 月撮影）。かつては古いゴンパ（僧院）があるのみだった。撮影時はロッジが建ち並んでいたが・・・

よってできた谷）の山ぎわにはランタン村（標高 3,500m）があります。さらに奥にあるキャンジンゴンパ村（図 3）も大きな被害を受けたということです。村の背後にそそり立つ岩壁の上方の氷河が地震により崩落し、それがきっかけとなって地すべりが発生し、ランタン村はほぼ全滅しました。

今回の地すべりは各地で悲惨な災害となりましたが、実はヒマラヤでは地すべりは、人への被害がなければ、良いこともあります。地すべりというのは急峻な山が侵食され、より平坦になる自然の過程（地球の営み）のひとつです。そこに人が住んでいれば自然災害になるわけです。ヒマラヤのような険しい山地に人が生活できるのは、侵食や地すべりにより土砂が生産され、傾斜が緩くなるからです。そこに人は段々畑を作り、住み着きます。実際地すべり地は傾斜が比較的ゆるく、水



図 4 中央ネパール、ナンギ村の段々畑（1989 年 10 月撮影）

持ちも適度によく、湧き水があり、ヒマラヤでそういうところに村ができています（図4）。

最後に、今回の地震（2015 ゴルカ地震といわれています）の原因について簡単にお話します。一般に、ヒマラヤはインド大陸（インドプレート）とユーラシア大陸（ユーラシアプレート）の衝突帯であるといわれていますが、それは正確ではありません。ヒマラヤは、上記のように、両大陸の衝突の産物であるとはいえませんが、ヒマラヤ自体はインド大陸に属しています。両大陸の境界（衝突帯）は、ヒマラヤ主稜（ネパールと中国の国境付近）から100~200km北方のインダス川最上流とツァンポ川（ブラマプトラ川の最上流）が西北西-東南東方向に流れている部分です。そこはインダス-ツァンポ縫合帯といわれています。縫合帯とは大陸と大陸が衝突して合体したところという意味です。しかし、現在この縫合帯にはかつて両大陸の間にあった海洋のなごりである海底岩石が点在していますが、現在も北に移動しているインド大陸の押し付ける力の影響は認められません。その押し付ける力の影響は、上に述べた、ずっと南の衝上断層群によって岩層が積み重なっているところ（ヒマラヤ）に現れています。このように、ヒマラヤは両大陸の衝突帯そのものではなく、その南のインド大陸内の衝上断層帯に位置しています。

図5はカトマンズ付近を南北に切った地質断面図で、ヒマラヤの地下の衝上断層群の構造を示しています。図の左（南）はネパールとインドの国境付近、右（北）の高いところがヒマラヤ主稜部です。したがって、衝突帯であるインダス-ツァンポ縫合帯は図のずっと右側です。図に示すように、ヒマラヤの深部には、南のインド平原あたりでの深度10kmから北のチベット高原での深度30kmにいたる北へゆるく傾斜する水平に近い断層（デコルマ）があり、そこからいくつもの南へ押し上げる衝上断層（図のMCT・MBT・MFT）が枝分かれしています。4-5cm/年のインド大陸の移動量の半分以上はこの衝上断層群の形成による地殻の短縮によってまかなわれています。これらの断層運動がヒマラヤの上昇や地震の原因になっています。図中の上の楕円部の断層が斜めになっているところで、多くの地震が起きていることがネパールの地震観測センターの研究からわかっていますが、今回の地震の原因となった断層面（震源面）は北へ5°ほど傾いていることが東大地震研究所の解析からわかっています。したがって、2015 ゴルカ地震は下の楕円部の深度15km付近（図では少し深めですが）のデコルマがずれた（破断した）のが原因と推定されます。

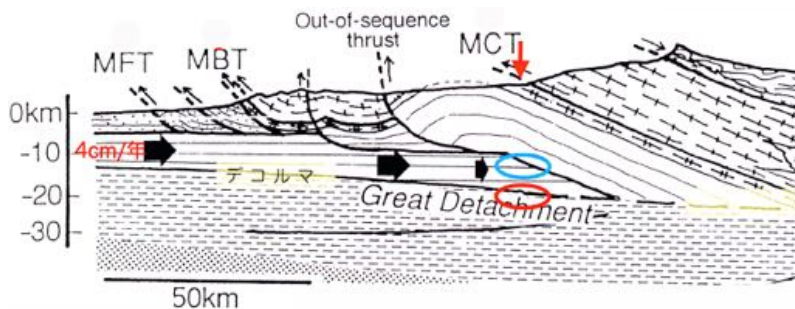


図5 ネパールヒマラヤの南北地質断面
下向きの矢印は震源の位置を示す。地表部分の高さは正確ではない

お知らせ

重要文化財

札幌農学校第2農場 一般公開を再開

(札幌キャンパス内 北18条西6丁目)

札幌農学校第2農場(通称:モデルバーン)は、19か月間の耐震改修工事を完了し6月14日(日曜日)より一般公開を再開しました。

【開場案内】

- ・屋外公開: 8時30分~17時00分
- ・屋内公開: 10時00分~16時00分
(模範家畜房・穀物庫・牧牛舎)
- ・期間: 通常4月29日~11月3日
- ・休館日: 毎月第4月曜日

耐震改修工事が終わりましたが、古い建物ですので、階段など安全と云えないところもありますけれど、重要文化財ですから、一見の価値有です。総合博物館が休館中のことでもあり、足を延ばしてはいかがでしょうか。

重要文化財
札幌農学校第2農場
(札幌キャンパス内 北18条西6丁目)
6月14日一般公開を再開
環境整備中27,May(芝生播種)
改装した模範家畜房(左)と牧牛舎
牧牛舎の補強状況
札幌農学校第2農場(通称:モデルバーン)は、19ヶ月間の耐震改修工事を完了し、来たる6月14日(日)より一般公開を再開します
▶屋外公開 8:30~17:00
▶屋内公開 10:00~16:00
(模範家畜房・穀物庫・牧牛舎)
▶期間 (通常4月29日)~11月3日
▶休館日 毎月第4月曜日
お問合せ: 北海道大学総合博物館 Tel:011-706-2658 Fax:011-706-4029

北海道大学総合博物館ホームページより



平成遠友夜学校へのお誘い

平成遠友夜学校は北大の先生や学生、一般の方の講演を通して、学生・市民が共に学びを深める場です。興味のある方もない方も、北海道大学の内と外をつなぐ貴重な機会ですので是非おこしください。

毎週火曜日(祝日は除く) 18:15~20:30

北海道大学 遠友学舎にて(北18条西6丁目)

事前予約不要・無料

校長: 藤田正一(北海道大学獣医学研究科名誉教授)

教頭: 北海道大学の学生

講義日程は HP・Facebook に記載 メール: enyuyagakko@gmail.com

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース 第37号

- ◆編集人: 北海道大学総合博物館ボランティアの会(編集委員: 星野、今井、大山、児玉、沼田、山岸)
- ◆発行人: 在田一則
- ◆発行日: 2015年6月1日
- ◆連絡先: 〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-4706
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。 <http://www.museum.hokudai.ac.jp>